

熟議空間における廃語プロセス

黒崎貴史*・有元光彦

On Obsolescence Process in the Deliberative Discourse Space

KUROSAKI Takashi, ARIMOTO Mitsuhiko

(Received September 29, 2017)

1. はじめに

語形成プロセスに関する研究は、語形成論において多くの研究者によって研究されている。しかし、そのどれもが新語の形式的な分析を行うことに留まり、それを生み出す人間に着目した研究は見られない。言語社会の中にいる人間は、どのように新語を形成していくのだろうか。また、そこにはどのような言語行動や思考プロセスがみられるのだろうか。

新語を研究対象として扱う場合、切り離せない問題として「廃語プロセス」がある。「廃語」とは、以前は使われていたが、時代的・社会的要因や代わりとなる語が新たに形成されるなどして、次第に使われなくなった語のことをいう。従って、廃語プロセスとは、ある語が使用されなくなっていく過程を指す。廃語を扱った研究は少なく、廃語プロセスの実態についてはほとんど未知であると言っても過言ではないであろう。

しかし、廃語プロセス1つ取っても、実際の言語社会の中でそのプロセスを詳細に時系列で追究することは困難である。そこで、新たな調査方法の1つとして、実際の言語社会を模した熟議空間を実験室の中に作成し、そこでの参加者による熟議を通して新語形成プロセスを観察する、という方法論を提案する。これによって、熟議参加者がどのような言語行動を取るかを詳細に観察できることになる。

このように、本稿では、新語形成を言語社会の中の人間が行う言語行動として捉え、新語を形成する熟議において、どのような新語が捨てられていったのかを観察し、実際の言語社会の廃語プロセスとの比較を試みる。

2. 先行研究

本節では、廃語について論じた研究と、本稿の基礎となる黒崎(2017)での研究について述べる。

2. 1. 廃語化・消失

米川(1989)は、流行語の消滅について論じた。米川は、「寿命はおよそ五～十年であろう。しかし中には「ハイカラ」のようにもう流行語ではないにしても。今も生きつづけて九十年になる語もあれば、「ダァ」のように昭和初期から二十年間使われた語もある」(p.224)と述べている。

井上(1998)は、語の消失を以下のように分類した。

A 語形の新旧交代

- ①旧物新語：「いいなづけ→フィアンセ」(借用)
「蝦夷地→北海道」「細君→奥さん」
「コンパ→飲み会」(とらえ方の変化)

B 忘却、昔懐かしいことば

- ②若者ことば
 - ③流行語
 - ④世相語
- } 使用時期が短く、廃れていった。

- ⑤レアリア(実物)の消失：「縁台」「行水」など

- ⑥習慣や概念の消失：「三つ指」「チッキ」

生活様式の変化

- ⑦レアリアの中身の変化：

「風呂(ごえもんぶろ→据え風呂)」

「はさみ→日本はさみ→(廃語)」

「(なし)→西洋はさみ→はさみ」

また、語が消える要因としていくつか挙げているが、そのうち、今回の分析結果と関わりがあると思われる「借用」と「陳腐化」について述べる。

借用とは、従来、和語や漢語で表していたことばが、外来語に変換されることによって消失してしまうことをいう。このような外来語の変換について、「数百年また千年以上にわたる日本語史の傾向の反映である」と述べ

* 山口大学大学院東アジア研究科大学院生

(p.41), ①に関わる原因であるとまとめた。

陳腐化とは、若者ことばや流行語の面白さが薄れていくことをいう。長く使われる語はそれほど好かれていることを指し、「つまり話し手の言語能力には使用頻度や使用状況についての情報も含まれる」(p.41)ということになる。

高野(2002)は、『明六雑誌』(1874~1875)を対象に、この時期に新たに加えられた2字漢語のうち現在は使われなくなった廃語の検討を試みた。廃語の理由として、a) 語の構造、b) 漢字の難易度、c) 専門語と一般語、d) 個人に限られる語、e) 語の競合、が挙げられている。

高野(2002)は文字を対象に分析を行ったが、本稿のような音声言語においても似たような廃語プロセスが起きるのではないかと仮定し、分析・検証を行った。例えば、本研究と関わりのあるe)について述べると、明治期には、「抵抗」の文字が転倒することによって「抗抵」が作られた。明治中期まで両語は競合し、「抵抗」が残った。このように、廃語には複数の語が競い合うという例がある。

このような廃語の理由が、本研究の熟議空間においても適合するのかを検証した。

2. 2. 熟議を利用した新語形成プロセス

黒崎(2017)では、熟議を利用した言語実験を用い、1. で述べたような問題について論じた。熟議とは、一つの課題に対して複数人が協力して話し合い、全員が納得する解決策を決定するという議論の型のことをいう。ここでは、大学生12名を対象に、筆者が提示したテーマに相応しい新語を熟議によって作るというものである。テーマは以下の2つである。

テーマA：前から歩いてくる人におつかりそうになって左右に避けたらまたおつかりそうになる現象

テーマB：部屋の隅や路地裏などを、誰もいないのについて見てしまう現象

4人1グループで上記のテーマについて話し合い(熟議)、新語を作成してもらった。

この研究では、言語行動も独立した単位として見なし、従来の談話単位である発話(音声言語)とは区別し、言語行動に着目した「表態」という単位を設けている。これは、従来の話題で区切る「話段」とは区別し、新語の最終的な決定までに経ている段階的な作業工程の集合で

ある。

また、新語が作成されるまでに熟議参加者が行う様々な言語行動を、「新語形成フェーズ」として規定した。これは「認知(テーマについて具体的に話す場面)」「枠組み(新語の語形や読み、相応しい構成要素について話す場面)」「提案(形成した新語を提示する場面)」「審議(提示された新語の是非について述べる場面)」「脱線(課題とは関係の無い内容を話す場面)」の5種類が現れている。新語形成における談話は、これらを行き来することで構成されていることが判明した。

さらに、言語行動を「表態に表れた当事者の新語形成上の言語運用や意思表示」と定義する(cf. ネウストプニー：2003)。つまり、単なるコミュニケーションを円滑に進めるための発言や行動は除き、あくまで新語形成に直接的に関わると判断したものを選定している。¹ また、先述の通り、従来言われてきた造語法のパターン(例えば、複合、省略など)も言語行動として捉える。本研究では、言語行動を【表1】のように分類した。

「形態操作」とは、語と語を組み合わせたり、あるいは短くしたり、新語の文体を変えたり、複合語の要素を並び替えたり、語を共有したりといった、語の形態を意識した言語行動のことをいう。「統括操作」は、情報をまとめて一つの語を形成する言語行動である。「音声操作」は、テーマの行動から擬音を抽出したり、類似している、あるいは共通の音を意識するといった、音声に関する言語行動をいう。「拡張操作」は、何かに例えたり、文学や映像などのメディアから情報を持って来たり、母語(日本語)以外の言語に変換したりといった、他の言語行動よりも情報探索の範囲を広げて情報を得る言語行動をいう。

また、これらをさらに大きなグループに分類した。参加者が情報を与える立場に立ったときに確認できる言語行動を「与え手の言語行動」、情報を受け取った際に現れる言語行動を「受け手の言語行動」、参加者全員が行う言語行動を「共同の言語行動」とした。

従来の新語研究では、出来上がった新語の構造分析が主であったが、黒崎(2017)では新語が形成されるプロセスを、参加者の言語行動から分析した点で斬新なものであろう。従って、廃語プロセスを記述するうえでも有益な方法である。

¹ 身振り手振りや発言そのものも言語行動として捉えられるが、ここではこれらを含めない。

【表1】言語行動の分類

与え手の言語行動	形態操作…セリフ化・複合・省略・派生・並び替え
	統括操作…同一化・概括
	音声操作…オノマトペ化・音声転換・掛詞化・混成
	拡張操作…比喩・引用・非母語化
	表記操作…字形の選択
受け手の言語行動	賛成・拒否
共同の言語行動	停滞

3. 言語実験方法

本稿では、黒崎（2017）の方法論を用い、熟議を行う参加者達がどのような廃語プロセスを辿るのかという問題について分析していく。言語実験の方法は、以下の通りである。

言語実験の参加者は大学生12人、小学生8人である。これをまず以下のように、4人ずつのグループに分けた。「A-1」などの記号は、本稿で用いるグループ名である。

- A-1（大学生）：A（22歳・女性）、B（21歳・女性）、C（21歳・男性）、D（21歳・女性）
- A-2（大学生）：A（21歳・男性）、B（21歳・女性）、C（21歳・男性）、D（21歳・男性）
- A-3（大学生）：A（18歳・女性）、B（18歳・女性）、C（18歳・女性）、D（18歳・女性）
- A-4（小学2年生）：A（7歳・男性）、B（7歳・男性）、C（8歳・男性）、D（7歳・男性）
- A-5（小学5年生）：A（10歳・男性）、B（11歳・男性）、C（10歳・男性）、D（11歳・男性）

言語実験の手順としては、まず上記の各グループに同じ熟議課題を与え、次に各グループでの熟議を通して、その課題に相応しい新語を作ってもらふ。課題は、「前から歩いてくる人におつかりそうになって左右によけたらまたおつかりそうになる現象」に名前をつける」というものである。

グループ分けの際には、熟議を円滑に行えるよう、親交のある人物どうしになるようにした。参加者はそれぞれA、B、C、Dのアルファベットで表記している。今回、参加者の性別や出身地などの属性は考慮していない。また、実験者（筆者）はKで表している（結果に余計な操作が加わらないよう実験そのものには参加していない）。

実験の時間は、大学生が30分間、小学生が10分間で、その間に新語が決まらない場合は延長して、決まるまで話し合いを行った。

得られた言語データについては、本稿では【表2】のようにまとめて示す。新語形成に関わる言語行動と思われる部分や提示された新語が話題となっている部分は、網掛けで表している。

【表2】言語データ及び分析の表記方法

新語形成フェーズ	表態	言語行動	中心となっている新語
	020001K: 今日本当にありがとうございます。 020002ABCD: (礼。) 020003C: そこからあるんですね。(笑う。)		
	(中略)		
提案	020133D: 「思いやりの一致」。 020134A: ああ。 020135D: ど、同致？	概括	思いやりの一致
審議	020136A: ああね。思いやりの… 020137B: でもそういうことよね。 020138A: うん。	賛成	

【表2】の表態欄には発話された言語データを記載しているが、左側の6桁の数字のうち、最初の2桁は言語実験番号である。次の4桁は発話の通し番号である。その次にあるアルファベットは発話者（参加者）の記号である。言語データの中でカギカッコ付きの太字になっているものが、形成された新語である。また、言語データ中のスラッシュ（「/」で表している部分）は、同時発話が起きた箇所を示している。重ねられた箇所にスラッシュを入れ、その下の同じ場所にさらにスラッシュを入れ、重ねた側の発話を記載している。また、（ ）内は、笑いなどの非言語的要素を示す。記号？は、語末や文末におけるイントネーションの上昇を表す。

4. 分析

本節では、参加者が熟議中に選ばなかった新語、及び廃語プロセスについて述べる。

今回、熟議中に新語を消去するパターンとして、「借用」「陳腐化」「語の転倒」を仮定する。

4. 1. 借用

実際の言語社会では、井上（1998）のこのような借用による語の消失が起こる。本研究における熟議空間でも、参加者が借用（非母語化の言語行動）によって形成した新語を消去する例が見られた。例えば、【表3】を見られたい。

【表3】A-3（大学生）における借用

提案	040118B:「鏡現象」。	比喻	鏡現象
審議	040119C:「鏡現象」。		
	040120D:鏡…。	賛成	
	040121C:あ、面白そう。		
	040122ABCD:(笑う。)	賛成	
	040123C:できちゃった。(笑う。)		
	040124B:早い。(笑う。)		
	040125D:(笑いながら。)うちら何も言ってない。		
	040126ABCD:(笑う。)		
	040127A:何もしてないよね。		
	040128D:な、うーん。		
	040129B:もっと/出す?		
	040130D: /普通すぎん?	拒否	
	040131A:うん、普通。だって、普通じゃ/いかんの?		
040132C: /え?普通じゃだめ?	賛成		
040133B:普通でいいんやけど。			
040134D:え、普通…。	拒否		
枠組み	040135C:いいよ。英語/にしても。	非母語化	
	040136A: /ミラー。	比喻・非母語化	
提案	040137B:「ミラー現象」。		ミラー現象

ここでは、まず040118Bで「鏡現象」という新語を形成している。これに対して、040119C~040134Dで審議を行った後、「鏡」を非母語化（英語に変換）させ、040137Bで「ミラー現象」という新語を形成している。このような非母語化の言語行動を「借用」とする。これによって、以前の言語データである「鏡現象」は参加者によって消去され、「ミラー現象」が残るのである。

一方、小学生でも、借用の例が見られた。【表4】を見られたい。【表4】を見てみると、09106Cで「鏡合い」を形成した後に、09117Bで「ミラー越し」、

09120Bで「ミラー合い」という新語を形成している。その後も「鏡」が新語構成要素として選択されているが、09269Bの「鏡コピー」より後は「ミラー」が競合に勝っている。最終的には、「鏡」が非母語化により消去されるのである。

以上のことから、熟議が進むにつれ外来語の勢力が強くなり、参加者が以前に形成した語を消去しているというプロセスを確認できる。しかも、このプロセスは、大学生にも小学生にも起こっていることから、一般的な言語行動と言えるのではなかろうか。

² 黒崎（2017）と同様、これらが言語行動である可能性は高いが、本稿では扱わない。

³ 米川（1989）の「消滅」、井上（1998）の「消失」ではなく「消去」という言葉を使っているのは、参加者が何かしらの意識を持って新語を捨てていると考えているためである。

【表4】A-5（小学生）における借用

提案	090106C:鏡、「鏡合い」。	比喩	鏡合い
枠組み	090107A:ミラー。	非母語化	
	(中略)		
提案	090116A:「イツマジック」。	非母語化	イツマジック
	090117B:「ミラー越し」。「ミラー越し」。	比喩・非母語化	ミラー越し
審議	090118C:自分とさ、全く同じみたいになるけーさー、「鏡合い」とか。		鏡合い
	090119A:「鏡合い」。(笑う。)		
提案	090120B:ミラー、「ミラー合い」。	複合・非母語化	ミラー合い
	(中略)		
枠組み	090166A:鏡を英語に。 090167C:鏡みたいやん！え、何？ 090168A:鏡を英語に。 090169D:もはやスターみたい。 090170C:ミラー。「ミラー合い」。え、じゃー他に何かある？いいやつ。	非母語化	
提案	090171A:「ミラーコピー」。	複合・非母語化	ミラーコピー
	090172B:「なんで通してくれないの？」	セリフ化	なんで通してくれないの
	(中略)		
提案	090196B:「人々連鎖」。	複合	人々連鎖
	090197C:「鏡連鎖」。		鏡連鎖
枠組み	090198B:鏡 090199C:か、か、違う。		
	(中略)		
提案	090263B:「人間ミラーコピー」。	複合	人間ミラーコピー
審議	090264C:「人間ミラーコピー」にする？	賛成	
枠組み	090265D:鏡いる？	拒否	
審議	090266A:(笑いながら)「人間ミラーコピー」。なぜ。 090267B:鏡っぽいし、いやもう/ 090268C: 「鏡合い」かー/ 090269B: 「鏡コピー」「鏡コピー」。	複合	鏡コピー
提案	090270C:「鏡コピー」かー、「人間/ 090271B: ミラー/コピー」か。 090272C: ミラーコピー」か。	賛成	鏡コピー、 人間ミラーコピー
審議	090273A:んー。長すぎる。	拒否	人間ミラーコピー
提案	090274B:「コピーミラー」か。「コピーミラー」。	差し替え	コピーミラー
枠組み	090275A:もっとシンプルに。		
審議	090276B:じゃけ、「人間コピー」。(笑う。)	賛成	人間コピー
枠組み	090277C:人間 090278A:するつと。するつと。 090279C:え、じゃー、一文字だけ 090280A:いらぬ部分削って。	省略	
提案	090281C:に、にみ、「にみこ」。		にみこ
審議	090282D:(笑う。) 090283A:(顔を机に伏せる。) 090284C:(笑いながら)「にみこ」。 090285A:単弥呼みたいやん。 090286C:に、「人間ミラーコピー」やけー 090287B:「人間ミラーコピー」やる？	拒否	人間ミラーコピー

4. 2. 陳腐化

消去する様子が窺えた。【表5】を見られたい。

新語を選定する中で、感覚的な理由で参加者が新語を

【表5】A-1（大学生）における陳腐化

提案	020333A:「他人との意気投合」。	概括	他人との意気投合
審議	020334B:(笑う。) 020335D:意気投合ね。なるほどね。(笑う。) 020336C:意気投合… 020337A:いやなんかね、簡易、安易すぎる。それはちよつと。 020338D:(笑う。) 020339A:そうでしょって感じ。	拒否	
		拒否	

【表5】は、新語の構成要素である「意気投合」について話している場面である。これについて、020337Aで「いやなんかね、簡易、安易すぎる」と述べている。また、その後020339Aで「そうでしょって感じ」とも述べている。これは、「相手と同じ方向に避ける」というテーマの性質を「意気投合」で表現するのは熟慮が足りず、面白みが無いと感じているのではないかと推察でき

る。他者に「(そりゃ)そうでしょ」と思われたい、新しく興味を持たれるような新語を形成したいという意識があると考えられる。ただし、その新語が「安易」かどうかは、個人の感覚による。このように、感覚的な理由により新語を消去する現象を、井上(1998)に倣って「陳腐化」とする。

また、【表6】のようなものが見られた。

【表6】A-1 (大学生)における陳腐化

提案 審議	020575A:「歩行時意気投合現象」。	複合	歩行時意気投合現象
	020576D: ああなるほどね。(笑う。)	賛成	
	020577A: 意気投合っていうか、なんか違う。	拒否	

【表5】では、「他人との意気投合」という新語が採用されなかったが、【表6】の020575Aでは、「歩行時意気投合現象」のように再び「意気投合」を含んだ新語が形成されている。しかし、これも020577Aで「なんか

違う」と否定されている。これ以降、「意気投合」が使われることがないことから、参加者全員が感覚的にすぐわないと判断しているといえる。

さらに、【表7】のようなデータも見られる。

【表7】A-3 (大学生)における陳腐化

審議	041827ABCD: (5秒沈黙。)	停滞	
	041828D: (手を叩きながら)みんなも言おうよ。なんで私に		
	041829A: いや、「ディフェンス」って言ったじゃん。	賛成	ディフェンス現象
	041830D: 「ディフェンス」。		
	041831C: 鏡って言っとるやろ。	賛成	ミラー現象
	041832ABD: (笑う。)		
	041833C: 「ミラー」「ミラー」。		
	041834D: 「ミラー」? えー。	拒否	
	041835C: 鏡ってかっこよくない?	賛成	
	041836B: かっこいいけど、でも「ディフェンス」の方が近い気がする。		
041837A: あ、きた。一票入った。	賛成	ディフェンス現象	
041838C: んー。分かんなくもない、それは。			
041839A: やった。			
041840D: (AとCの顔を見る。)			
041841C: 「ディフェンス」。			
	(中略)		
審議	041919B: いいの? じゃあ「ディフェンス現象」。	賛成	ディフェンス現象
	041920D: 「ディフェンス現象」でいいんじゃない?		
	041921B: お。お。		
	041922A: (Cに対して)ミラーさんの意見は、はん、反対なの?		
	041923C: ない。だってっそれうちの考えだもん。	賛成	
	041924ABCD: (笑う。)		
	041925B: リーダーだって。		
	041926D: めんどくせえな。よし、オッケー。		
	041927B: え、「ディフェンス現象」で		
	041928D: いいんじゃない?		
	041929C: うん。		
	041930B: 決まりですか?	賛成	
	041931D: はい。		
041932B: はい。			
041933ABCD: (手を叩く。その後笑う。)			

【表7】は、「ディフェンス現象」と「ミラー現象」のどちらが相応しいかについて話し合っている場面である。041835Cで「ミラー現象はかっこいい」という旨の発言があり、それに対して041836Bで「「ディフェンス」の方が近い気がする」と述べ、41838Cもそれに賛同している。そして、熟議の最終部(041919B~041933ABCD)で「ディフェンス現象」を選んでいる。選んだ理由について具体的には述べておらず、「「ディフェンス」の方が近い気がする」(041836B)だったり、

「分かんなくもない」(041838C)のように、曖昧な表現を用いて述べていることから、これも感覚的な理由だと判断できる。

4. 3. 語の転倒

並び替えの言語行動によって形成した新語と、その元となる新語を比較するデータがみられた。【表8】を見られたい。

【表8】A-4 (小学生)における語の転倒

提案	080078B: /「だめむり」。	複合	だめむり
	(中略)		
提案	080087A: 「むりだめ」の方がいいんじゃない? 「むりだめ」。	並び替え	むりだめ

並び替えの言語行動とは、複数の語で形成された新語の構成要素の順番を並び替える言語行動である (cf. 黒崎 2017)。【表 8】では、08078B で形成された新語「だめむり」の構成要素である「だめ」と「むり」の並びを入れ替えて、08087A で「むりだめ」という新語を形成している。そして、「「むりだめ」の方がいいんじゃない?」と、両者を比較する発話を行っている。なお、これ以降の熟議では、「だめむり」は捨てられ「むりだめ」が選ばれている。

このような構成要素の入れ替えによる比較は、高野 (2002) が指摘した転倒の競合と似ている。高野 (2002) の分析は文字言語における廃語プロセスだが、音声言語 (熟議) においても転倒による競合に似た現象が確認できたことになる。しかし、対象が異なるため、高野の指摘した例と同じ現象とするには問題がある。そこで、高野の指摘した「文字の転倒」と区別するため、本節における転倒を「語の転倒」とする。

また、【表 9】のようなデータも見られる。

【表 9】A-5 (小学生) における語の転倒

提案	090956C:「サイドリポートシンクロ」。	複合	サイドリポートシンクロ
	(中略)		
提案	090972B: サイドのシンクロのレポート! 「サイドシンクロレポート」!	並び替え	サイドシンクロレポート
	(中略)		
審議	091037A: 「サイドリポートシンクロ」。	賛成	サイドリポートシンクロ
	091038B: こっちの方がスカッとすくなくない? なんか。		
	091039D: (頷く。)		
	091040A: (紙を指して) 上がいい。		
	091041C: 俺、「サイドシンクロレポート」。	賛成	
	091042B: じゃ、こっちで決定。(紙に○を書く。)		
091043A: 俺皆と離れとるな。			
091044C: (笑う。)			
091045B: じゃー、サイドシン			
提案	091046C: サイシン、(紙を指して笑う。) 「サイシンレポート」。(笑う。)	省略	サイシンレポート
	(中略)		
提案	091092B: 「サイシンピー」。(笑う。) サイシン	省略	サイシンピー
	(中略)		
提案	091114C: 「サイクロレポート」は?	省略	サイクロレポート
	(中略)		
審議	091126K: 決まりましたか?	賛成	サイドシンクロレポート・ サイクロレポート
	091127A: 決まりました。		
	091128K: じゃー、もう一回だけ、えーっとー、決まったものを教えてもらっていいですか?		
	091129A: 最後にピース。(カメラにピースサイン。)		
	091130C: 「サイドシンクロレポート」で、略すと	賛成	
	091131B: 略して		
	091132C: 「サイクロレポート」。	賛成	

ここでは、まず「サイドリポートシンクロ」(09956C) という新語が形成され、その後、並び替えによって「サイドシンクロレポート」(09972B) という新語が形成されている。これ以降、「サイドシンクロレポート」という新語そのものは現れていないが、「サイシンレポート」(091046C) や「サイシンピー」(091092B) のように形を変えて現れている。そして、最終的には「サイドシンクロレポート」の省略形の「サイクロレポート」が選ばれている。

以上のように、ここでは語の転倒によって2つ新語が形成され、どちらが最適かについて比較・検討が起きている。最終的には、いずれか1つが選択され、もう1つは消去されることになるのである。

5. まとめ

本稿では、新語が廃語化される要因となる言語行動を、熟議の中から見出してきた。その結果、借用、陳腐化、

語の転倒、という3種類の言語行動を仮定することができた。

まず、借用による廃語化とは、熟議の最初の段階では和語を構成要素として造っていくが、熟議が進むにつれて、それを借用によって母語(日本語)以外の言語に変換し、以前に形成された新語は無くなっていく、というものである。また、陳腐化による廃語化とは、感覚的な理由によって新語を捨てる、というものである。さらに、新語の構成要素が転倒することによって、さらなる新語が形成され、それによって以前の語が廃語化する現象も確認できた。これは、語の転倒が起きた結果廃語化するものである。

言うまでもなく、これら3種類の要因以外でも廃語化が起こる可能性はあるだろう。しかし、最も重要なことは、これら3種類の言語行動、ひいては廃語化という言葉行動が、実際の言語社会の中と同様、熟議空間の中においても観察できたことである。このことは、本研究に

における言語実験方法の有用性を検証することに繋がるのではないかと考えられる。さらに、本稿での言語実験方法を用いることによって、廃語化以外の新語形成プロセスを、実際の言語社会と熟議空間との間で比較できるだけでなく、言語社会では現時点で観察されていない言語現象を、熟議空間では予測できるかもしれない。この予測性に関して、本稿の言語実験方法は提示することができるのではないだろうか。

しかし、言語データが少ないこと、廃語化といった新語形成プロセスを理論化した研究が少ないことから、実際の言語社会における新語形成プロセスと、熟議空間といった実験室における新語形成プロセスとが同質のものであるとは言い切れない。現時点では、廃語化といった同様の新語形成プロセスが、両者の言語環境において観察できたということに過ぎない。

他にも様々な問題が残っている。例えば、陳腐化による廃語では「感覚的な理由」が契機となっているが、「感覚的な理由」とは何であろうか。また、そもそもなぜ借用や陳腐化や語の転倒が起こるのであろうか。これらの言語行動は、廃語化の必要条件なのであろうか。この問題は、廃語プロセスだけの問題ではなく、新語形成プロセスすべてに関連する根本的な問題であろう。

今後もさらに詳細な言語実験データを収集・分析することによって、この問題の本質を明らかにしていかなければならない。

参考文献

- 井上史雄 (1998) 「ことばはなぜ消えるか—廃語と近代化」『月刊言語』第9号 大修館書店 pp.35-44
- 加茂正一 (1944) 『新語の考察』三省堂
- 窪菌晴夫 (2002) 『もっと知りたい! 日本語 新語はこうして作られる』岩波書店
- 倉橋美穂子・高橋登 (1998) 「異なった意見をもつ児童間で行われる話し合い過程の発達の検討」『発達心理学研究』第3号 日本発達心理学会 pp.191-200
- 黒崎貴史 (2017) 「言語行動から見る新語形成プロセスについて—熟議を利用して—」『東アジア研究』15号 山口大学大学院東アジア研究科 pp.51-70
- 佐久間まゆみ (2010) 「文章・談話の分析単位」『『言語』セレクション』第1巻 月刊『言語』編集部 編 大修館書店 pp.93-100
- サックス, H., E.A. シェグロフ, G. ジェファソン (2010) 『会話分析基本論集 順番交替と修復の組織』西阪仰 訳/S. サフト 翻訳協力 世界思想社
- 清水康行 (1998) 「消えた語形、消えた言い回し」『月刊言語』第9号 大修館書店 pp.45-50
- 高野繁男 (2002) 「『明六雑誌』の語彙構造—2字漢字を中心

に(その2)—」『人文学研究所報』 神奈川大学 pp.47-57

デボラ・カメロン (2012) 『話し言葉の談話分析』 林宅男 監訳 ひつじ書房

都恩珍 (2004) 「日常会話における同時発話—発話文類型に見る機能性—」『桜花学園大学人文学部研究紀要 6号』 桜花学園大学 pp.203-221

ネウストプニー, J.V. (2003) 「日本の言語行動の過去と未来」『朝倉日本語講座9 言語行動』萩野綱男 編 朝倉書店 pp.1-28

米川明彦 (1989) 『新語と流行語』南雲堂

米川明彦 (1996) 『現代若者ことば考』丸善